

碧雲湖棹歌詠注(二)

要 木 純 一

全 澗橋 浅田吉 東京(三十二)

澄波万頃白雲飛 澄波は 万頃にして 白雲飛ぶ

汀樹経霜絵夕暉 汀樹は 霜を経て 夕暉を絵かく

新婦洲辺秋亦好 新婦 洲辺 秋も亦た好し

楓人入画着紅衣 楓人は 画に入りて 紅衣を着る

どこまでも続く澄んだ波の上を白い雲が飛んでいく。渚の木々は霜に降られてもみじに染まり、夕日に彩りを添えている。嫁が島あたりの景色は春も良いが秋もまたなかなかのものだ。楓の神が紅い服を着て絵の中のようなこの世界に入ってきたようである。

「楓人」は、もともとは楓樹に出来た、人の形をしたこぶのこと。ここでは、紅葉をもたらす神のようなものを指していると考えた。「楓」は日本の「カエデ」と種類が違うがこだわる必要はない。

全 菖水 辻沢玄 越後人 住東京(三十三)

両三鷗鷺背人飛 両三の 鷗鷺は 人に背きて飛ぶ

新婦洲辺看晚暉 新婦 洲辺に 晚暉を看る

欵乃一声天在水
白蘋香上緑蓑衣

欵乃の一声 天は水に在り
白蘋の香りは上る 緑の蓑衣

二羽三羽と、鷗や鷺が、人に背を向けて飛び離れていくなか、嫁が島のあたりで夕日を鑑賞する。空が映っている水面を、よつこらしよと舟をこぐ声。白い浮き草の香りが船頭の緑の蓑に上ってきていることだろう。

杜甫『帰雁』「二人に背きて飛ぶ」、柳宗元『漁翁』「欵乃一声山水緑なり」、李賀『帝子歌』「涼風雁声天は水に在り」、張志和『漁夫』「青き箬笠、緑の蓑衣」などを利用してゐる。

全 江舟 沢野章 美濃人 住東京(三十四)

湖天一片碧雲飛
影落漁舟澹夕暉
無限遙峰青欲斷
蒼茫秋色滿蓑衣

湖天に一片の碧雲は飛ぶ
影は漁舟に落ちて夕暉澹なり
無限の遙峰 青断たんと欲し
蒼茫たる 秋色 蓑衣に満つ

湖の上の空を一切れの澄んだ緑色の雲が飛んでいく。その雲の影が漁師の舟に落ちかかかって、夕日の光がうつすらと照っている。果てしなく続く遙かな峰峰は、うつすらと青くて、消えてしまふそつだ。どこまでも広がっていく秋の寂しい気配が漁師の蓑に立ちこめてゐる。

全 映雪 谷村銀 東京(三十五)

碧雲湖上白鷗飛
新婦洲辺空落暉

碧雲 湖上 白鷗飛ぶ
新婦 洲辺 空しく暉を落とす

一片詩碑自千古
長教騷客掃苔衣
一片の詩碑は自すから千古
長なえに騷客をして苔衣を掃わ教む

宍道湖上空を白い鷗が飛び、嫁が島あたりに夕日が空しく落ちていく。美しい自然はひとに価値を知られることなくこれまで時を移してきた。しかし、このたび、永坂石埭翁は碧雲湖棹歌を作つてその価値を世人に知らしめた。その詩を刻んだ碑は一かからの小さなものではあるが、当然何千年も残るもの。この碑のおかげで、何時までも、文学愛好者たちは碑に生えた苔を払つて、この詩を読んでは、宍道湖の美しさに改めて感嘆することであろう。

邵雍『首尾吟』「上陽宮殿は空しく堵を遣し 金谷園林は但だ暉を落とすのみ」。邵雍の詩では、上の句との対応から「落暉」は「暉を落とす」と読まざるを得ない。(六)の詩でかく読み、こどもそれに倣つた。しかし、「空しく落つる暉」「落暉空し」の読みも可能で、作者はそのつもりだったかもしれない。以下、文脈によつては「落つる暉」の意として解釈することがある。「騷客」は、また「騷人」ともいう。もと楚辞の『離騷』を作つた屈原一派の人、引いて詩人、文学者一般。

全 集詞句 竹磎 森川鍵 東京(三十六)
極浦烟消水鳥飛 極浦 烟は消えて 水鳥飛ぶ
垂楊裊裊弄晴暉 垂楊は 裊裊として 晴暉を弄ぶ
神仙一曲漁家傲 神仙の 一曲 漁家は傲る
喜薄裁雲作舞衣 薄きを喜び 雲を裁ちて 舞衣と作す

湖の向こうまで、もやが晴れ渡つて、その中を水鳥が飛んでいく。しだれ柳はなよなよと風に吹かれ、あたかもお日様の光に戯れているかのような風情。神仙世界の歌曲(碧雲湖棹歌)を漁師が誇らしげに歌っている。その漁師……

実は仙人の永坂石球翁は、仙人にふさわしく、薄い布地が好きなので、雲をきりとって踊り用の服装にしている。

『詞句を集む』。詞学の大家であった森川竹礫は、全ての句を中国の詞から取って来るといふ離れ業をやつてのけた。起句は、牛嶠『江城子』其二より一句。承句は、方十里『浣沙溪』。転句は晏殊『漁家傲』。結句は趙彦端『鷓鴣天』。総詠。いずれも、皆原句をそのまま用いて、しかも次韻し、平仄を合わせ、ひとつの世界を作りあげている。

全 琴坡 土屋政朝 東京(四首 其一)(三十七)

洲前白鷺掠波飛

洲前 白鷺は 波を掠めて飛び

岸上桃花奪落暉

岸上 桃花は 落暉を奪う

正是鰈魚時節好

正に是れ 鰈魚の時節は好し

新郎披得綠簑衣

新郎 披り得たり 緑の簑衣

春。嫁が島の前をシラサギが波ぎりぎりに飛んでいく。宍道湖岸では、桃の花が盛りで、落日の美しさをはるかに凌いでいる。折しもちようどケツギヨのうまい季節。先日結婚したばかりの旦那が、緑色のみのをかぶって漁に出かける。(嫁が島伝説の美女生前の一場面あるいは眼前の風景)

他の作家が一人一首を原則とするのに、ここから四首の連作。宍道湖の四季を詠んでいるため、编者としては削るに削れなかったのだと思う。

鰈魚は和名ケツギヨ。ただし、中国では「鰈」はケイの読みのほうが優勢なようである。転句は、杜甫の『江南にて李龜年に逢う』に「正に是れ江南の好風景、落花の時節に又君に逢う」とあるのを意識しているだろう。

(全) 琴坡 土屋政朝 東京 四首・其二(三十八)

浪花風動打舷飛

浪花 風に動き 舷を打ちて飛び

一陣爽涼浮曙暉
載得碧羅雲樣薄
人言新婦旧時衣

一陣いちじん 爽涼そうりょう 曙暉しよけい を浮うかぶ
載えせ得えたり碧羅へきらの雲くもの樣ように薄うすきを
人ひとは言いう新婦しんぷの旧時きよときの衣ころもなりと

夏。風に吹かれた波しぶきが舟端にぶつかって飛んでいく。一陣のさわやかな風に朝日が浮かんでいるかのようだ。舟は、雲のように薄い、緑色の絹の衣を載せている。それは往時の嫁が島神女の服なのだと言つ。「碧羅」は幻像なのか。それとも、碧雲が船にうつすらとかかっていることなのか。あるいは嫁が島およびその周辺の緑の植物や水をさすのか。わざと思わせぶりに作った詩であらう。

(全) 琴坡 土屋政朝 東京 四首・其三(三十九)
風渚蘆花吹雪飛
釣簦白立秋暉
湖亭為有鱸魚膾
一醉朝来又典衣

風渚ふうしよの 蘆花ろかは 雪ゆきを吹ふきて飛とび
釣簦ちようさうは 白はくしん尽じんして 秋暉あきけいに立とつ
湖亭こてい 為ために 鱸魚ろぎよの膾なます 有あり
一醉いっすいして 朝来ちようらい 又衣またころもを典てんす

秋。渚の蘆の花が、風に吹かれて雪のように飛ぶ。秋の夕陽を浴びて立っている、漁師の簦は、蘆の花ですつかり真つ白になってしまった。湖の畔の料亭で、スズキの刺身を我々の為に用意してくれた。たいそうなご馳走で酔つ払つてしまった。懐はすつからかん。あの美味でまた酒が飲みたいものだから、朝起きてからまたまた服を質に入れてしまったよ。

結句は、杜甫の『曲江』「朝より回りにて日日春衣を典す」を意識しているであらう。

(全) 琴坡 土屋政朝 東京 四首・其四(四十)

碧雲飛尽暮鴉飛 碧雲 飛び尽くして 暮鴉飛ぶ

湖上扁舟擢雪暉 湖上の 扁舟 雪暉を擢んづ

誰擁寒梅花一朵 誰か擁せん 寒梅の花一朵

烟波影蘸美人衣 烟波 影は蘸さん 美人の衣

冬。夕方、緑色の雲が風に吹かれてあらかたなくなってしまうと、カラスが飛び始めた。湖に浮かんだ小舟が、雪の反射光の中を、目もしるく進んでいく。誰だろう、船の上で、寒梅をひとひら手にとつて、もや立つ湖面の波に映し、嫁が鳥神女の服(湖景)をその柄で染めようとしやれ込んでいるのは。(六道湖の冬景色に魅せられた詩人か) 「擢」はよくわからないが、真っ白な雪景色の中、小船の色が特に目立っていることをいっているのである。あるいは「擢」(かじ、かいで舟をこぐ)の誤植か。

全 蓄堂 結城琢 但馬人 住東京(四十一)

碧雲湖上碧雲飛 碧雲 湖上に 碧雲飛ぶ

依旧碧雲籠落暉 旧に依りて 碧雲は 落暉を籠む

手撥碧雲來棹月 手もて 碧雲を 撥いて 來りて月に棹さす

碧雲秋染旧吟衣 碧雲 秋に染む 旧の吟衣

六道湖、雅名碧雲湖に碧雲が飛ぶ。いつものように碧雲は落日を覆っている。あなた方剪漣吟社の面々は、手で碧雲をはらいのけながら、月の下、舟をこいで詩作に耽る。そうすると、この秋、詩人たちの昔のままの古びた着物が、その碧雲の色に染め直されることになる。

「碧雲」を各句で繰り返して、碧雲湖棹歌碑の完成を祝った。結句は、風光明媚な宍道湖に近い地の利を活かして、詩作に一層の磨きをかけたことを期待していると言つことであらう。

全 蕙軒 魚住完治 東京(四十二)

青松影裡白鷗飛

青松 影裡 白鷗飛ぶ

誰錯行帆趁夕暉

誰か 行帆を 錯きて 夕暉を 趁う

十日石尤風不斷

十日 石尤の 風は断えず

可憐新婦引郎衣

あわれ 新婦 郎の衣を引く

青々とした松の木陰を白い鷗が飛んでいる。このどかな風景画に、いったい誰が、帆を張る舟が夕日を追つて船路を急ぐ図を描こうというのか。(と嫁が島の女神は思った) そうはさせない、女神の力で、十日間、厳しい向かい風が絶えることなく吹き続けた。あなた行かないで、と新婦(女神)が新郎(女神がほれた男)の服を引っ張っているのだらう。その愛情たるや哀切である。

「承句は不可解。「錯」は、「サク」と読めば、「まじえる」、「ソ」と読めば「おく、すえる」の意。いずれにせよ、異様な措辞。少し無理であるが、女神のヴィジョンにおける配置のことだと考えた。女神にとつて、宍道湖に旅行く舟があるのは、目障りでたまらない。

「趁夕暉」は、陸游『九月十八日山園に至る。是の日頗る春意有り』に「未だ尽くは幽興を尋ねず、家に還らんとして夕暉を趁つ」とある。

「石尤風」について、『江湖紀聞』なる書(たとえば、清の陳元龍『格知鏡原』の風の部に引用)によれば、石氏の娘が尤家に嫁いだ。夫は商用で旅に出たが帰つてこない。石氏は心配のあまり病気になる、死ぬ間際に、「天下で商売で旅に出るものがあれば、その妻のために私は風となつて、船出を阻んでやる」と言った。以来、船に対する逆風

を「石尤風」というようになった。と。由来は怪しいが、すでに劉宋の孝武帝の『丁督護歌』に「願わくは石尤の風と作りて、四面行旅を絶たん」とある。以来、特に唐詩でよく使われる語。無理やり理屈を通して訳したが、本来は気分で読むべき詩なのであろう。

全 霞江 安富晋 東京(四十三)

白鷺白鷗相映飛

白鷺と白鷗と 相映じて飛ぶ

青山平遠澹斜暉

青山 平遠にして 斜暉澹し

湖光細縷微波影

湖光の 細縷 微波の影

一幅霞成新婦衣

一幅の 霞は成す 新婦の衣

白い鷺と白い鷗がお互いに引き立てるかのように映えあって飛んでいる。青い山の緩やかな稜線がずっと遠くへ伸びている中、うつすらとした夕陽が落ちていく。湖の輝きは細かな絞り染め模様のように、さざ波の反射が美しい。たなびく細い霞が、嫁が島神女の嫁入り衣装として見立てられそうだ。

「平遠」は、「高遠」、「深遠」と並ぶ、山水画の画法。起句、承句と一幅の絵を鑑賞するかのような書きぶりである。「縷」は絞り染めにした布。「影」は本来の意味は光。転句は「湖光は細かに微波の影を縷(しば)る」と読ませるつもりかもしれない。「一幅」は書画の掛け軸のことであるが、「霞」を絵と見立てているのか。あるいは掛け軸の如き帯状の霞をいうのか。

全 龍川 丸山鑽 信濃人 住東京(四十四)

碧雲湖上碧雲収

碧雲 湖上に 碧雲収まる

楊柳影濃新婦洲

楊柳 影濃し 新婦洲

同人結社号剪淞
 詩酒徵逐振筆鋒
 最好惠風駘蕩候
 輕鷗泛泛春水皺

同人 結社 剪淞と号す
 詩酒 徵逐して 筆鋒を振つ
 最も好し 惠風 駘蕩の候
 輕鷗 泛泛として 春水皺す

宍道湖の雲はすつきりと晴れ渡り、嫁が島の柳のみどりの色がこくなつた。あなた達の漢詩同人結社の名は剪淞吟社。詩や酒を応酬しあつて、すばらしい作品を世に輝かせている。折しも、やさしい春風の吹く、のんびりとした気候、うつすらと皺が寄つた春の水の上を、身も軽げに、鷗がぶかぶか浮いていることである。剪淞吟社の雅会はいよいよ盛んならんことを祈ります。

六句の変例。しかも、次韻詩ではなく、「収」「洲」が下平十一尤、「淞」「鋒」が上平二冬、「候」「皺」が去二十六宍というように、換韻をしている。編者の横山耐雪の困惑たるやいかばかりであつたことか。「徵逐」は、求めたり、付き従つたりすることで、友人がいつも連れ立って遊ぶ様子。韓愈「柳子厚墓誌銘」「酒食遊技相い徵逐す」。「筆鋒」は本来筆の先の意味。転じて、書法や詩文の気迫。日本語で「筆鋒鋭い」と言うときの攻撃的なニュアンスはない。「惠風」は、王羲之『蘭亭序』に「惠風和暢」とあるように、春の穏やかな風。下句に「春水」があるので、重複を嫌つて、「春風駘蕩」の語を避けたのであろう。「駘蕩」は、丁子音で始まる双声の擬態語。のんびりとしたさま。「輕鷗」の「輕」は、軽く浮いている感じであるが、すすすすと動くような軽快さも兼ねた語かもしれない。「泛泛」は水を漂うさま。白居易『開元寺東池』「情に適う鷗は泛泛」。

全 松坡 田辺新 肥前人 住鎌倉(四十五)
 只怕愁雲湖上飛 只だ怕る 雲を越えて 湖上に飛ぶを
 漁郎載得麗春暉 漁郎 載せ得たり 麗春の暉

霓裳相和棹歌曲
坐使人思新羽衣

霓裳げいしょう 相和あいわ 棹歌しやうかの曲きょく
坐まぞろに 人ひとをして 新羽衣しんういを 思おもわ使しむ

雲を追っかけて宍道湖上空を飛び去って、どこかに行ってしまうのではないかと、ひたすら案じて、漁師は、うららかな春の光に満ちた神女を引き留めて、舟に乗せて帰って来た。(永坂石球翁が碧雲湖棹歌を作ることによって、このままでは失われてしまったかもしれない宍道湖や嫁が島の美しさを永遠に後世に残すことが出来た) 神女の奏する霓裳羽衣曲が碧雲湖棹歌と美しいハーモニーを成している。我々は、何となく、新たなる羽衣の伝説が宍道湖において生まれたかのような気持ちにさせられたことだ。

「霓裳」は神の着るような虹色の服。ここでは、唐代の楽曲「霓裳羽衣曲」を指すのであろう。西域の音楽で、玄宗が潤色し、楊貴妃が踊ったという。伝説では、玄宗が方士とともに、月の宮殿に遊び、そこで聞いたメロディをもとに作ったことになっている。宋、王灼の『碧鷄漫志』参照。要するに天上界の音楽。結句は謡曲の羽衣に対して「新羽衣」と言っているのだと思う。

この詩、無理矢理訳したが、解釈に自信がない。

全 敬軒 久保木昇 下総(四十六)

鴛鴦鸚鵡儘双飛
水帯春痕蘸斜暉
真個洲名新婦好
漁娃未嫁織蓑衣

鴛鴦えんおう 鸚鵡けいよく は 儘ふたに 双ふたながら 飛とぶ
水みずは 春痕しゅんこんを 帯おびて 斜暉しやくきを 蘸ひたす
真個まことに 洲しゅうの 新婦しんぶと 名なづくるは 好よし
漁娃ぎょわ 未嫁いまい 織かるに 蓑衣さいいを 織おる

小さなおしどり、大きなおしどりが、つがいになって、好きなだけ空を飛ぶ。湖水は行く春の名残を留めつつ、お

りしも傾きかけた夕日を浸している。この鳥を嫁が鳥というのは、本当にうまい命名だ。嫁入り前の漁師の娘が、愛する男のためにみを織っているという見たてがしたくなるような風景。(おしどり、湖水、夕日等の湖の風景は蓑衣の文様のようにあり、湖面を往来する漁舟は、あたかもその巨大な文様を織り成す梭であるかのようにだ)

「儘」は現代漢語の「尽管」。出来るだけ、最大限に。「鶯鷺」は大型のおしどり。「鴛鴦」と同じく、雌雄で行動を共にする。夫婦愛の象徴。「春痕」は永坂石球の詩を受けるなら、花びらの散った潮の名残ということになる。しかし、張炎「杏花天(賦疎杏)」に「枝上の春痕を閑がしむる莫かれ」とあるのを見ると、一般的に春の雰囲気が(残花なりの形として)残っていることを言うのではなからうか。「娃」は慣用音「あ」。また「わ」の音あり。美しい娘。

楫浦 高塚躋 下総(四首・其一)(四十七)

沙鳥烟帆処処飛

沙鳥 烟帆 処処に飛び

漁村風物媚春暉

漁村の 風物は 春暉に媚ぶ

多情最是嫁洲柳

多情は 最も是れ 嫁洲の柳

長与詩人欲拂衣

長えに 詩人の 与に 衣を拂わんと欲す

春。砂辺を樓家とする鳥たちが、かすみのかかる舟の帆を背景にあちこち飛んでいる。漁村の風景はあたかも春の光に愛情を注いで、彩りを添えているかのようである。このような景色の中、感情に富んで、思いやりが深いのはなんと言っても嫁が島の柳で、ここで詩を詠む人の為にいつまでもその着物をやさしくなでてきれいにしてくれる。

これも春夏秋冬の四首連作。

崔仲容『歌妓に贈る』に「筵に当たりて一曲春輝に媚ぶ」(『唐詩紀事』所収)とある。「媚」はやはり「媚びる」ということであろう。「うつくしい春の光」あるいは「春の光がうつくしい」というつもりで承句を作ったのではあるまい。転句は韋荘の『台城』「無情なるは最も是れ台城の柳」を相当に換骨奪胎した。

(全) 楫浦 高塚躋 下総 四首・其二(四十八)

仙者來游名條飛 仙者來り遊び名は條ち飛ぶ

嫁洲水木発清暉 嫁洲の水木清暉を発す

棹歌一曲玉池調 棹歌一曲玉池の調へ

万口相伝換紵衣 万口相い伝え紵衣に換う

夏。石埭仙人が宍道湖に来て詩を作ったので、嫁が鳥の名声はあつという間に広がった。おかげで、鳥の風物は増しに清らかな光を放っているように見える。一曲の棹歌は仙界の玉池のメロディにのせて歌われる、何万もの人々が口々に伝えあつて、この歌を聴くためなら貴重な布も惜しげなく差し出したいと思つたのだつた。

この詩、よくわからない。永坂石埭の『碧雲湖棹歌』碑が建立されたのは、大正四年六月四日。(入谷仙介・大原俊二著『山陰の近代漢詩』「剪淞吟社年表」参照) すなわち初夏であるのを意識するか。石埭の原歌には「春潮」とあるが、漁師が舟に乗り、棹歌を歌うのは夏こそがふさわしいという気持ちもあつたかもしれない。「玉池」は仙界の池。晋の傅玄の『擬楚篇』に「崑崙に至り、玉池に漱ぐ」とある。しかし「玉池調」は不詳。仙界の音楽といったところか。あるいは、「玉池」は道教用語で口のことなので、口ずさむことを大仰にかく言つたか。「紵」は「からむし」、麻の一種。『春秋左氏伝』、襄公二十九年、鄭の子産が、呉の季札に、はなはだ貴重なものとして「紵衣を献じ」とある。その直前に季札が周の音楽を評した有名な故事が収められているのが、結句で利用されているのでないか。あるいは、人々が棹歌を口ずさみながら夏服に着替えるという程度の軽い意味なのかもしれないが。

出だしは、石川丈山『富士山』の「仙客来り遊ぶ雲外の顛」を意識するであろう。

(全) 楫浦 高塚躋 下総 四首・其三(四十九)

棹歌声罷晚鴉飛 棹歌 声は罷みて 晚鴉飛び

洲尾残霞襯晚暉
 洲尾しゅうびの残霞ざんかは晚暉ばんきに襯しんす
 想見鯉魚風起日
 想見そうけんの鯉魚りぎよの風起かぜあこる日に
 蘆花点綴釣人衣
 蘆花あしか点綴てんていす釣人ちよしんの衣ころも

秋。棹歌の聲が聞こえなくなり暮れのカラスが飛び始めた。嫁が島の端にきれぎれのかすみがかかって夕陽と映えあっている。思い浮かぶことだ。陰曆九月の風吹く頃、蘆の花が釣り人たちの衣服に点々と降りかかっている、そんな情景が。

「鯉魚風」の由来はよくわからないが、晩秋の風。梁簡文帝「艷歌篇」「塵は散る鯉魚風」。李賀「江樓曲」「鯉魚風起こりて芙蓉老」。

(全) 楫浦 高塚躋 下総 四首・其四(五十)
 長汀無復一禽飛 長汀ちやうてい復またたと一禽いっきんも飛とぶ無なく
 漠漠同雲鎖夕暉 漠漠はくはくたる同雲どううんは夕暉せききを鎖とざす
 漁子已判来日雪 漁子りしは已すでに判はんず来日らいじつの雪ゆき
 船頭各自載蓑衣 船頭せんとうに各自かくじ蓑衣さいを載のす

冬。長いみぎわにはもはや鳥が一匹も飛ばなくなり、薄暗い雪雲はそら一面に広がって夕陽を隠している。漁師たちは明日は雪だなあと早くも判断して、どのへさきにもみな蓑を載せている。

「同雲」は雪を降らす雲。空一面同色になるのでかくいう。『詩経』小雅「信南山」に「上天の同雲、雪を雨(ふ)らすこと紛紛」が出典。「判」字の場所は平声をおくべきところ。「判」は普通は仄声だが、「あまんじる」の意のとき、平声で用いる。(杜甫「杜工部草堂詩箋」卷十一「曲江值雨」「縦飲するも久しく判ず人の共に棄つるを」の箋に

「判は普官の切」とあり平声で用いている（これを援用して、動詞として「判断する」の意で用いる場合においても平声で読むとみなしたのか。

全 三香 本宮庸 下総（五十一）

碧雲湖上燕双飛

碧雲湖上 燕は双ひ飛ぶ

影傍桃花恋夕暉

影は桃花に傍い夕暉を恋う

将嫁漁娃看艶殺

将に嫁せんとする漁娃看るみる艶殺

春衣一剪擬烏衣

春衣一たび剪りて烏衣に擬す（「烏」はもと「鳥」に作る。今改む）

宍道湖の上を二つがいの燕（男女の情愛の象徴）が飛んでいき、その影は折しも盛りの桃の花に寄り添い、夕陽の落ちる（人生の快樂が去っていくこと）のを恋い惜しんでいるかのようだ。これから結婚しようとする漁師の娘はどんどん美人になってゆく。（嫁が島の春爛漫たるをたとえた）。春用の服を裁縫して、ツバメの姿に倣って、黒い服を誰かさんのために作ろうとしている。

「看」は、自然や時の流れ等、制御することができぬまま変化していくのを、じっと見守るしかない感じ。「みるみる」、「みずみず」と訓ずる。多く平声。「殺」は程度の甚だしいことを示す助字。とはいえ、ここでは見る人が死んでしまうぐらいに美しいという気持ちもあるつ。「烏衣」はよくわからないが、訳文のように、ツバメの黒い羽、愛人の服と言ったところを指していると考えたい。

全 忘剣 上村才 陸中（五十二）

目断峭帆天外飛

目断す 峭帆 天外に飛ぶを

湖雲十里送斜暉

湖雲 十里 斜暉を送る

相思別後潮来去

碧蘼漁娃新様衣

相思そし 別わかるのち 後のち 潮来去しほらいま

碧みどりはひた 蘼す 漁娃あひのこころ 新様しんようのころも衣

聳え立つような帆が天空のかなたに飛ぶように消えていくのをいつまでも見続ける。宍道湖の雲は十里も続いていて、夕日が没していくのを見送っているようだ。思い人が別れた後はただ潮が行き来するばかり。湖水の反映が、恋する漁師の娘の今風の服を緑色に染めている。

「目断」は見えなくなるまで見続けること。「峭帆」は、山のように険しい巨大な帆布。李白『横江詞』「狂風愁殺峭帆の人を。」「送斜暉」は、李商隱『落花』に「迢遞として斜暉を送る」とある。結句は、あるいは、新たに整備された嫁が島が、みどりの木々におおわれている様を言っているのかもしれない。

全 菊畦 西川光 羽前(五十三)

松青砂白夢空飛

新婦洲辺持夕暉

何日冠童相伴去

碧雲湖上着春衣

松まつはあお青すなくし 砂すなはしろくして 夢ゆめはむなしくと飛とぶ

新婦しんぶ 洲しゅう辺へんに 夕暉せきを持しす

何なんれの日ひにか 冠童かんどう 相あいと伴ともいて去ゆき

碧雲へんぐん 湖上こじょうに 春衣しゅんいをちやくせん

松は青く砂浜は白いすばらしい景色、残念ながら夢でしか行けない。嫁が島あたりで夕日がいつまでも没せずにいる光景が目につかぶ。いつか、成人になった子供と一緒に連れて行って、宍道湖湖畔で春服を着て観光したいものだ。「持夕暉」は単純に「待夕暉」の誤植か？原文のまま無理に解釈してみた。『礼記』の「曲礼 上」に、「二十は弱と曰う、「冠す」とある。こころも、おさない我が子が成人したら、ということである。

全 竹石 逸見武 羽前(五十四)

思郎情作碧雲飛 郎を思えば 情は 碧雲と 作りて 飛ぶ
掃黛新粧臨鏡暉 黛を掃きて 新粧 鏡暉に臨む
好是湖波明激灑 好し是れ 湖波 激灑明らかなり
錦紋如織嫁時衣 錦紋は 嫁する時の衣を 織りたるが如し

あなたのことを思い続ける私（嫁が島神女）の魂はみどりの雲に変わって飛んでいくようだ。私は眉を引いて化粧をしたばかり、じつと輝く鏡を見詰める。宍道湖にさざなみが明るくたっているのはまことにすばらしい景色だ。錦とも見まごうさざなみの文様は、嫁入り衣裳を織ったかのようなだ。（そのように美しく化粧した私。あなたと早く結ばれたい）

全 竹隱 高野清雄 尾張人 住京都(五十五)

碧雲離合落霞飛 碧雲 離合して 落霞飛ぶ
湖日恒含山水暉 湖日 恒に含む 山水の暉
大勝帷車閉新婦 大いに勝る 帷車もて 新婦を閉ずるに
涼波湿尽采蓮衣 涼波 湿し尽くす 采蓮の衣

みどりの雲が離れたりくっついたりする中夕もやが飛んでいく。湖を照らす日にはいつも山水の風光も加わっている。（山水が日に映えてすばらしい）輿に垂れ幕をかけて新婦を隠すよりはずっと勝っている。蓮の実をとる乙女（素朴な嫁が島神女）の服が涼しい波にすっかり湿ってしまっている、その姿のほうが。（嫁が島的美がもの惜しみなく露わにされていることに感嘆、感謝するのである）

宋の張耒の『秋思』詞に「空しく恨む碧雲離合して、青鳥沈浮するを」とある。「山水暉」は、謝靈運『石壁精舍、湖中に還る』「山水清暉を含む」を意識する。「帷」は、女性の車のとばり、垂れぬの。「采蓮」、中国江南地方では、若い女性が小舟に乗って蓮の実をとる。夏の風物詩。「採蓮曲」という樂府題にもなっている。

全 蘇天 服部久 京都（五十六）

恍見美人湖上飛

恍として見る 美人の 湖上に飛ぶを

水光山色映斜暉

水光 山色 斜暉に映ず

朝雲暮雨巫山夢

朝雲 暮雨 巫山の夢

也似嫁時新婦衣

也た似たり 嫁する時の 新婦の衣に

宍道湖にぼんやりと伝説の美人が嫁が島の化身が飛んでいるのが見える。水の光、山の色が夕陽をうけて照り映えている。神女が、朝に雲となり、夕べに雨となるというあの巫山の夢の故事を思わせる風景、美人の嫁入り衣装に見立てることもできようか。

承句は、蘇軾の『湖上に飲む。初め晴れて後に雨ふる』「水光激灑として晴は方に好く、山色空濛として雨も亦た奇なり」を利用してゐる。転句は、(十九)の詩で既に引いた宋玉の『高唐賦』が典拠。「雲」や「雨」は例によって男女の情愛を象徴する。

全 舟溪 遠藤大 伯耆人 住京都（五十七）

嫁洲絶勝夢空飛

嫁洲の 絶勝に 夢は空しく飛ぶ

不識何時趁碧暉

識らず 何れの時にか 碧暉を趁わん

遙想春風秋月宴

遙かに想う 春風 秋月の宴

詞華薰徹美人衣
詞華 薰りは徹す 美人の衣に

嫁が島のすばらしい景色は夢にのみ見るばかりで未だ行く機会を得ない。何時になつたら宍道湖でみどりの雲を追いかけることができるだろう。はるかに遠くから思いやることだ。あなた方吟社の面々が、春の風にふかれながら、あるいは秋の月をめながら、うたげを張って作った、数々の名詩の高雅な香りは、美人（嫁が島神女）の服すなわち宍道湖にしみこんで、いつまでも消えないであろうことを。

全 扨堂 木村得全 京都（五十八）

懷彼美人魂夢飛 彼の美人を懷えば 魂夢飛ぶ

湖山何日趨清暉 湖山 何れの日にか 清暉を趨わん

嫁粧窈窕碧雲底 嫁粧は 窈窕たり 碧雲の底

水作屏風烟作衣 水は 屏風と 作し 烟は衣と作す

例の美人（嫁が島）のことを思うと、魂が夢になつて飛んでいきそうだ。いつか、清らかな光に照らされた、宍道湖の湖や山の風景を追つかけてみたい。緑色の雲の下、美人のお嫁入りのよそおいは綺麗だろうな。宍道湖の水がお嫁入りの美人を隠す屏風となり、もやが彼女の嫁入り衣装となつてゐる。

全 東海 綿引泰 水戸人 住京都（五十九）

碧雲湖上白鷗飛 碧雲 湖上 白鷗飛び

新婦洲辺欲夕暉 新婦 洲辺 夕暉ならんと欲す

激瀧淞江千頃水 激瀧 淞江 千頃の水

金波裁傲美人衣
金波 裁ちて傲つ 美人の衣に

宍道湖の上を白い鷗が飛んでいき、嫁が島周辺は夕陽に照らされる頃合いとなった。さざ波が宍道湖全体に立ち騒ぐ。その黄金色の波を、裁ちきつて嫁が島伝説の美人の服に仕立てたら面白からう。

全 秋渚 磯野惟秋 浪華(六十)

石翁絶唱墨華飛 石翁 絶唱して 墨華飛ぶ

将謂湖山復有暉 将謂えらく 湖山に 復た暉有り

新婦洲辺夕陽好 新婦 洲辺 夕陽好し

春雲農作美人衣 春雲 農として作す 美人の衣

永坂石球翁がすばらしい詩を作った。あたかも墨が飛び散るかのようなその気迫。この傑作により、宍道湖の風景が再び光を生じ、見直されるようになることと思う。嫁が島あたりの夕陽は実にすばらしいなあ。春の雲がなよなよとしているのを、美人が嫁が島の衣服と見立てようか。

「将謂」は「以為」に同じ、六朝以来の俗語。平仄の関係で用いた。ただ、この語は「……」と想っていたが実はそうではなかった」というニュアンスで用いられるのだが、ここはそうではあるまい。あるいは、単に「まさに……といわんとす」のつもりかもしれない。転句は、李商隱『楽遊原に登る』「夕陽無限に好し」を意識しているだろう。

全 松窓 岡田英 河内(六十一)

水禽憂憂劈波飛 水禽 憂憂として 波を劈きて飛び

沙嘴潮痕帯落暉 沙嘴の 潮痕は 落暉を帯ぶ

唱出採菱歌一曲
 湖雲碧染美人衣

唱うたい出いだす 採菱さいりやうの 歌うた一曲いっさく
 湖雲こううんの 碧みどりは染そむ 美人びしんの衣ころも

水鳥がカツカツと鳴いて波をつんざきながら飛んでいく。嫁が島の長く延びる砂州に残った潮のあとが、落日の光を浴びている。その時、菱取りの民謡を一曲歌い始めた美人。嫁が島神女。湖上のみどりの雲のいろにその服が染まっているかのようだ。

「憂」は物の相打つ音であるが、鳥の鳴き声にも使う。ここは、蘇軾の『後赤壁賦』「適ま孤鶴有り、江を横ぎりて而して来る。……憂然として長鳴して、予が舟を掠めて而して西する也」を意識してしよう。「採菱曲」は樂府題のひとつ。中国南方の民謡。南齊、王融の『採菱曲』に「荊姫は採菱曲、越女は江南謳」と。

全 簃香 八木三 播磨(二首・其一)(六十一)

白鷗汎汎掠人飛
 新婦洲前对晚暉
 詩与湖山争絶勝
 碧雲無縫是天衣

白鷗はくおう 汎汎はんはんとして 人ひとを掠かすめて飛とび
 新婦しんぶ 洲前しゅうぜん 晚暉ばんきに對たいす
 詩しは 湖山こさんと 絶勝せつしょうを争あひつ
 碧雲へきうん 無縫むほうなるは 是これ天衣てんい

白いカモメがふわふわと浮くように人のそばを飛んでいく。嫁が島に夕日が真つ向から照ってきた。あなた方剪淞吟社の作る詩は、湖や山の風景に対して、どちらが優れているか競い合っているようだ。おりしも、みどりの雲が切れ目なく天に広がっている。あたかも、縫い目のない、仙人が着るといふ天衣のようだ。そして、そのように諸君の作品も俗世を超越した仙人の気品に溢れているといえよう。

「天衣無縫」は既出。「詩」と「湖山」とが匹敵するのだから、どちらも天衣無縫ということになるであろう。

(全) 簫香 八木三 播磨 二首・其二 (六十三)
 一棹淞波興欲飛 一棹の 淞波 興は飛ばんと欲す
 湖山映帶有清暉 湖山 映帯して 清暉有り
 黛眉未掃鏡中影 黛眉 未だ掃かず 鏡中の影
 髣髴春雲是嫁衣 髣髴として 春雲は 是れ嫁衣なるがごとし

宍道湖の波に棹さすことに興味はいよいよ高まり、湖と山とが映えあつて清らかな光を発している。鏡に顔を映して化粧していて、まだ眉を刷いていないといった風情の嫁が島。何となく、その上をおおう春の雲が、彼女(嫁が島)の嫁入り衣装として見立てられそうな気がする。

王羲之の『蘭亭集序』に「又清流激湍有り、左右に映帯す」とある。

全 桂軒 望月与 神戸 (六十四)
 落日淞波興乍飛 落日の 淞波 興は乍ち飛び
 浩歌一曲棹餘暉 浩歌 一曲 餘暉に棹さす
 碧雲湖上流霞影 碧雲 湖上 流霞の影
 疑是古韓新嫁衣 疑うらくは是れ 古韓の 新嫁衣ならん

宍道湖の夕日を眺めると、興味は一瞬のうちに天にものぼらんばかりに高まる。大きな声で一曲歌いながら、残光の中、船を進めていく。宍道湖の上に夕映え雲が流れて湖面に映る。何か、嫁が島に女神をくるむ、昔の朝鮮風の嫁入り衣装のように見えることだ。

なぜ、「古韓新嫁衣」なのか、不審。国引き神話の時代から縁の深い、出雲と朝鮮の関係に思いを致したからか。

いずれにせよ、白無垢の嫁入り衣装ではなく、華美なものをイメージすべきであろう。したがって、「流霞」の「霞」は、和訓の「かすみ」ではなくて、本来の意味の「夕焼け雲」、仙界に漂うがごとき、五色に輝く雲を思い浮かべなければならぬのだろう。

全 鑑海 田端和 伊勢（六十五）

翩翩鷗鷺作群飛
翩翩たる 鷗鷺は 群を作して飛び
十里烟波恋夕暉
十里の 烟波に 夕暉を恋う
臨水楼台簾半捲
水に臨む 楼台 簾半は捲かれ
碧雲涼透美人衣
碧雲の 涼は透る 美人の衣

ひらひらと、カモメやサギの群れが飛ぶ。彼らは、十里も続くもやのかかった波の向うに降っていく夕日に心奪われてるのだろうか。水のそばのたかどのでは、すだれが半ばまで上げられている。みどりの雲からやってきた涼気は、美人の衣の裏までしみいつていくようだ。涼しげな女の風情。

「臨水」。剪淞吟社同人はしばしば湖畔の料亭「臨水亭」で雅宴を催した。偶然に名が一致しただけかもしれない。（前掲『山陰の近代漢詩』 剪淞吟社年表参照）

全 梅室 戸倉有 美濃（六十六）

水碧沙明帆影飛
水碧に 沙明らかにして 帆影飛ぶ
誰歟載筆泛斜暉
誰なる歟 筆を載せて 斜暉に泛ぶ
緬懷新婦洲邊勝
緬かに懐う 新婦 洲辺の勝
千古詩碑補嫁衣
千古の 詩碑は 嫁衣を補う

水はみどりいろ、砂浜は照り輝く中、帆の影は飛ぶように去っていく。誰だろう、筆を携えて、夕日のなか、船を浮かべているのは。ああ、永坂石球翁だ。はるかに離れた私の目にも思い浮かぶ。嫁が島付近のすばらしい景色が。そして、未来永劫に存在し続ける翁の詩の碑が、嫁が島の彩りをより深めているさまが。

「水碧沙明」、銭起『帰雁』に「水は碧に沙は明らかなり兩岸の苔」。「載筆」は、筆記用具を携帯すること。『礼記』「曲礼」に「史は筆を載せ、士は言を載す」とある。

全 珠堂 日野居龍 美濃(六十七)

縹緲碧雲湖上飛 縹緲たる碧雲は湖上に飛び

松青沙白帯斜暉 松青く沙白くして斜暉を帯ぶ

瀟湘一曲美人去 瀟湘の一曲美人は去り

唯見潮痕不見衣 唯だ潮痕を見るのみ衣を見ず

ぼんやりとかすんだ、みどりの雲が湖の上に飛んでいる。松は青々と茂り、砂は真っ白な嫁が島に夕日がさした。

瀟湘の曲のごとき、永坂石球翁の『碧雲湖棹歌』が奏でられる中、美人の幻影(嫁が島)は去っていく、日も暮れて、ただ潮の痕が見えるだけで、美人の衣装(嫁が島周辺の美景)も見えなくなってしまう。

「瀟湘」は中国の瀟水、湘水一帯。五帝の堯の二人の娘で、舜の妃となった娥皇、女英が、この地で舜の死を嘆きながら死んだ後、神となった。後世、「瀟湘神」や「瀟湘夜雨」等の詞牌(詞のメロディ)がこの故事に因んで作られた。「一曲」はこれらを指すか。いずれにせよ、悲劇のヒロイン、嫁が島神女にふさわしい出典である。また、「瀟湘八景」は古くからの景勝地。この点でも、六道湖の美しさになぞらえるのにふさわしい。「潮痕」は、永坂石球翁原詩の解釈においてすでに述べたように、この詩でも、岸に残った潮の引いたあと、水に残っている上げ潮のときのたたずまい、の両様に解せられる。

全 擔風 服部轍

尾張(六十八)

碧雲湖上碧雲飛

碧雲湖上に碧雲飛へきうんひ

新婦洲辺思鏡暉

新婦洲辺に鏡暉を思しんぷう

新婦百年倣姑日

新婦百年姑に倣しんぷひ

搦碑誰剔古苔衣

碑を搦するに誰か古えの苔衣を剔せん「搦」はもと「搨」に作る。今改む

穴道湖、雅名は碧雲湖の上空を碧雲が飛び、嫁が島あたりで女神が鏡の光をほしがっている。(しげしげとその鏡を見ながら自らの老いに思いをいたしている) 新婦たる女神が百年の後その意地悪な姑のように古いさらばえたとぎ、嫁が島の碑文の拓本を取るのに誰がその上の古いコケをほじって取り除くことになるであろうか。

石碑落成を寿ぐのにはちよつと不穩当な感じがするが、石碑が、苔の生すまで、神も年をとるような永遠にわたって、存在し続けるということがいいたいのであろう。気の置けない同士での軽い冗談か。

全 柳城 石川戈足 尾張(六十九)

使儂神往又魂飛

儂をして神往き又魂飛は使しんゆむ

万頃波光接晚暉

万頃の波光晚暉に接ばんけいす

湖上彩霞秋一抹

湖上の彩霞秋一抹さいかき

綺於新婦碧羅衣

新婦の碧羅の衣に綺なりしんぷき

この風景を見ると、魂も天に飛ばんばかりになる。波が広く一面に輝いて、夕日を迎えている。湖にかかる鮮やかな夕霞に、秋の気配をほんのり感じる。それが、お嫁さん(嫁が島)の緑のあやの衣に彩を添えている。

全 城陽 不破警 尾張 (七十)

見説輕帆傍岸飛 見説く 輕帆は 岸に傍いて飛び

碧雲鵬翻漏斜暉 碧雲の 鵬翻 斜暉を漏らす

松江一幅淘淘浪 松江の 一幅 淘淘たる浪

似織美人新嫁衣 美人の 新たに嫁するときの衣を 織るに似たり

人々が言うには、宍道湖では、船が風を受けて軽々と岸伝いに進み、おほとりの翼のようなみどりの雲、その隙間から夕日の光が漏れているのが、なんとも美しいということだ。夕日の反映を受けて、宍道湖の岸をあらう波はまさに一幅の絵、美人が嫁入りするときに織った衣装のがらもかくやと惚ばれるすばらしさだと、そう聞いた。宍道湖をまのあたりに見られる人はうらやましいことだ。

「漏斜暉」は、白居易『西風』に「疎竹斜暉を漏らす」とある。「淘淘」は水の流れるさま。「滔滔」と同じ。『詩経』小雅『四月』「滔滔たり大漢」。「淘」字には洗う、すすぐの意があり、岸边を洗う気持ちも兼ねていると考えた。

全 楓峡 尾形慶 尾張 (七十一)

水天霞鷺望中飛 水天の 霞鷺は 望中に飛び

尺楚寸吳含落暉 尺楚 寸吳 落暉を含む

也似君山青一带 也た似たり 君山 青一带なるに

襯將黛色合吾衣 襯するに 黛色を將つて 吾が衣に合わす

(嫁が鳥神女の独白) 水と空の風景ばかりの中、夕靄を帯びつつ、カモが、私の視野の中を飛んでいく。はるか彼方の天空から眺めている私にとっては、楚や吳の国なんて小さい小さい、一尺一寸程度のものだ。そんな地上の世界

が、静かに夕陽を浴びている。そういえば、嫁が島の風光は、中国の洞庭湖の君山が青い一筋の帯であるのとよく似ている。嫁が島の樹木のぼんやりとした眉墨のような青さを、私の服（嫁が島周辺の景色）にとりあわせてみよう。（宍道湖の調和のとれた美しさを讃える）

出典の多い凝った作りの詩である。「水天霞鷺」は、元の洪希文『陪東泉郡公作霖料院登嶺江水亭』（元詩選）所収）に「水天の霞鷺は人に背きて飛ぶ」と見える。おそらく作者は原文に当たったのではなく、『佩文韻府』を調べ、この語を得たのだと思われる。以下も同様、さらにさかのぼれば王勃『滕王閣序』に「落霞は孤鷺と与に斉飛し、秋水は長天と共に一色なり」。「望中」は視野の中、また想念の中。権徳輿『馮監の昭陵を拝して廻るに途中雨中に遇いて示さるるに酬ゆ』、「望中猶お弁す可し、耘鳥山椒を下る」。

「尺楚寸吳」は「尺吳寸楚」ともいう。高いところから見下ろすと、吳や楚の大国も小さく見えるように、ものが小さく見えるたとえ。明確な典拠があるわけではないが、例えば、袁宏道『天池由り三峽澗に至る記』に「尺吳寸楚」、查慎行『五老峰 海綿を觀る歌』にも「尺吳寸楚飛鳥の辺」とあり、よく使われる表現。「含落暉」、「含……暉」は、謝靈運『石壁精舍、湖中に還る』「山水清暉を含む」以来、詩語としてよく使われる。「含」は、「含羞」「含情」というように、はっきりおもてだつて現れない形で持っていることを言うのだろう。この「落暉」は「落つる暉（ひかり）」。

「君山」は洞庭湖の中の島にある山。古来詩の題材となる。大きさは甚だしく違つが、宍道湖の中の嫁が島と対比した。転句は、頼山陽『天草の洋に泊まる』「水天髣髴青一髮」の句作りを意識しているだろう。さらにさかのぼれば、蘇軾『澄邁駅通潮閣』「青山一髮是れ中原」。「君山」を帯としてではないが、青い田螺としてとらえたのが、劉禹錫『洞庭を望む』「遙かに望む洞庭の山色翠なるを、白銀の盤裏一青螺」。作者はこの詩も意識しているだろう。

「襯」は本来は「肌着」。「くつつける」「きわだたせる」「引き立たせる」と意味が広がった。ここでは、配色等を考えることをいうか。コーディネート。「黛色」は青黒色、青々とした山や樹木の形容。王維『崔濮陽兄季重の前山の興』「千里黛色を横たえ、数峰雲間に出づ」。

【附記】

本稿は、二 五年度科学研究費補助金 基盤研究（C）「剪淞吟社資料の整理・保存及び同吟社の文学活動に対する実証的研究」（研究代表者 道坂昭廣 課題番号 17520229）に基づく研究成果の一部である。

また、島根大学法文学部山陰研究センター 二 四年度山陰研究プロジェクト「山陰地域伝存の古典籍資料に関する基礎的調査研究」（代表者 蘆田耕一 番号0401）による予備的調査の成果の一部である。

『剪淞詩文』の閲覧に便宜を図っていただいた島根県立図書館に感謝申し上げます。

山陰漢詩の研究に私を導いてくださった入谷博士の学恩に感謝申し上げます。